「子どもの学びをトコトン支える県民の会」 第1回会議 議事録（全体部分）

日 時：令和7年7月3日（木） 13時30分～15時30分

場 所：長野県庁 特別会議室

1 開会

2 あいさつ

（長野県 阿部知事）

それぞれの分野の皆様方におかれましては、大変お忙しい中この「子どもの学びをトコトン支える県民の会」第1回の会議に御出席を賜りまして誠にありがとうございます。

今、急激に子どもの数が減っていく、人口減少、少子化の局面の中で、将来の長野県、あるいは日本を考えた時に、最も重要なことは、子どもたちの学びをどうしていくかということだと考えています。

そうした中、教育委員会、武田教育長を始めとする学校関係の皆様方と一緒にあって、様々な教育改革を進めていこうということで、取組を進めてきたところであります。また今日も荒井先生がご出席いただいておりますけれども、円卓会議を設けて、多くの皆さんと一緒にこれからの学びの新しい当たり前をともに創っていこうということで、大きな方向付けとともに教育長と私とで決意表明もさせていただき、長野県から新しい形の子どもの学びを創っていこうということで、取り組み始めているところでございます。

そうした中で、この教育あるいは学び、どちらかという今までは教育関係の皆様が一生懸命努力をいただいているところでありますけれども、しかしながら新しい当たり前を創る、新しい時代の学びのあり方を考えることは、決して学校の先生方や教育関係の皆様方だけでいいのかと、決してそんなことはないとは思っております。

もとより子どもたち自身が学びの主役であることは論を待たないわけでありまして、また保護者の皆さんや地域の皆様方の協力あるいは理解がなければ、学校の学びの在り方の変革も難しいと考えております。また多くの皆さんが子どもを中心に協力しあう、支えあうということが極めて重要だと思っております。

加えて、子どもたちがどういう学びをするのか、そしてそうした長野県の教育を受けて子どもたちがそれぞれの地域社会や産業分野で活躍していただくためには、

やはり地域の皆様や産業界の皆様方の考え方や今の問題意識ということも、子どもたちの教育を考える上で大変重要だと思っております。加えて、教育委員会の皆さんが大勢いらっしゃるんですけど、教育は教育委員会がやるという発想だけでも大変狭すぎだと思っております、例えば高等教育機関であったり、あるいは幼児教育を担っていただいている皆さんであったり、そうした皆さんとの協力・連携がなければ、この小・中学校、高校の教育の在り方も、正しい方向付けをするのは難しいと思っております。

そういう意味では子どもに関わる多くの皆様方と思いや問題意識をしっかりと共有しながら、是非長野県から学びの新しい形を創っていききたいと。まずは子どもたちの学びを多くの皆さんと一緒にとことん支えていききたいと、そういう思いでこうした県民の会を皆様と一緒に進めさせていただきたいと考えております。

今日は、そうした中でも、まず冒頭学校現場の現状について、お二方校長先生からお話をいただきたいと思っております。

報道等でもよく言われるように、教員の多忙化ということが言われるわけでありませう。やはり今申し上げたように、子どもたちは多くの皆さんの力で支えていただきたいと思っておりますが、しかしながら、日々学び舎で子どもたちに接していただいている学校の先生方、教員の皆さんが何よりもモチベーションを高く保っていただき、そして真に必要なところに力を傾注していく。要は本来教員が行わなくてもいいような仕事は、できるだけなくしていったり他の方に担っていただくというようなことも必要ではないかと思ひますし、またいろいろな形で先生方にだけに負担がかかっているようなものについては、例えば私が政治家として防波堤になったりとかですね、あるいは多くの皆さんと役割と責任を分担してもらったりとかですね。そういうことも必要になってきているのではないかと考えております。

そういう意味で、その後の討議では、ぜひこの学校業務について、どうすれば学校の先生方だけが頑張らなければいけないという状況から変えていくことができるのかということについて、皆さんとともに考えていききたいと思っております。

長い挨拶になって恐縮ではありますが、長野県様々な課題がありますが、やはり長野県の未来の希望は、やはり子どもたちだと思っております。子どもたちに関わる全ての皆さんに、ぜひ力を結集していただいて、子どもたちの学びを1人ひとりの子どもに合った形に変えていくということにお力をいただくと同時に、そうしたものを実現するための必要な環境作りに、またそれぞれ皆様方のお力をいただきたいということを冒頭私からお願い申し上げて、挨拶といたしたいと思ひます。どうぞよろしくお願ひい

たします。

(長野県教育委員会事務局 水野教育政策課長)

ありがとうございました。

ここで本日配布しました資料の確認をさせていただきます。次第、出席者名簿、座席表、それから資料1、2、3をお配りしております。

本日ご出席の皆様のご紹介ですが、恐れ入りますが出席者名簿の配付に代えさせていただきますしたいと思います。資料の関係、よろしいでしょうか？

なお本日の会議ですが、公開とさせていただきます。後日会議録、それからアーカイブデータを県のホームページの方で公開をさせていただく予定であります。このため会議の様子につきまして、録音録画をさせていただきますのでご了承をいただきますようお願いいたします。それでは会議事項に入っております。

この会議ですが、地域全体で子どもの学びを支える社会の実現に向けて開催をするものでございますが、今回はこの学校現場の業務といったところに着目をしてまいりたいと思います。

まず初めに学校現場の現状につきましてお話をいただきたいと思います。プレゼンテーションは長野市立緑ヶ丘小学校の野口茂雄校長先生、それから長野市立裾花中学校の土屋次男校長先生をお願いをしたいと思います。それではよろしく願いいたします。

3 冒頭プレゼンテーション「学校現場の現状について」

(長野市立裾花中学校 土屋校長)

長野市立裾花中学校長の土屋と申します。よろしく願いします。

(長野市立緑ヶ丘小学校 野口校長)

長野市立緑ヶ丘小学校長の野口でございます。よろしく願いいたします。それではここでは、学校現場の状況についてお話をさせていただきます。

学校では、どの学校の先生も日々子どものために一生懸命取り組んでおります。

初めに教員の職業的性格、教員の風土について申し上げます。教員は子どもの成長を我がことの喜びとして労を惜しまず、子どものために取り組む傾向がございます。

また、子どもとともに自分の成長や向上に向けた意欲が高く、様々な期待に応じたいという思いがあります。裏返すと、期待に応えられないことは不安であり、外的評価を気にします。

授業評価や学校評価では、ネガティブな評価に敏感で特に教員の悩みに繋がります。学校や先生が無責任だと言われることを恐れています。

続いて、社会の風潮についてです。教育内容は、社会の変化に呼応します。タブレットの利活用や多様な学びを進めることなど、新しい取り組みが進められてきています。

また、保護者が働く家庭が多くなる中で家を出てから帰ってくるまでの間、子どもの指導は学校が対応するという雰囲気や、休日中のネットトラブルは学校の指導不足である、という風潮も広がっています。

ときに過大な要求も求められ、対応が良くなければ、教育委員会へ相談や改善要望が出されることもあります。

今の業務に精いっぱいの中、保護者から学校の対応が困難な要望を出されることに正直不満を抱いています。

義務教育課の調査では、時間外勤務が年々減少しています。グラフをご覧ください。ればと思います。

校種別に業務の中で負担に感じていることの上位3つを見ると、小学校では「保護者対応」「学校行事に関わること」「生徒指導」で、中学校では「部活動指導」「保護者対応」「生徒指導」となっています。生徒指導や保護者対応は、ときとして解決の出口が見えづらく、成果も見通せないため、精神的な負担は大きいものがあります。

時間は減っても、多忙感や業務が減少に直接繋がっているというような感じは持てない、というのはどの学校においても、正直な実感でございます。

さらにそんな中で療休者がいても補充者が見つからない場合、校内で何とか対応していきますが、多忙感はさらに増加していきます。

今年3月、県教委が主催した働き方改革に係るワーキング会議では、教員の多忙化について話し合いがされ、県教委がその分析を行いました。内容のとりえは様々だと思いますが、内容的に登下校指導に関するものが比較的多くありました。これは学校が対応してきた経過がある一方、対応しないと学校が指導しないと評価される懸念があるなど、そういった意見が出されました。

現に、小学校ではクマやイノシシが通学路に現れたことで、朝の街頭巡視を行うこと、それが当たり前のように行われています。また、保護者対応や支援会議では、保護者の仕事の都合で支援会議そのものが夕方6時過ぎの学校が多く、勤務時間内にできないかなという話題も上がりました。

今回、小中学校別にその具体についてお話をさせていただきます。

初めに、小学校からお願いいたします。登下校について、ある学校では、事故対応も含め、学年ごとの集団下校をしています低学年の児童の保護者から、1時間経っても家に帰ってこないという連絡があり、学校職員10名ほどでチームになって探しました。結果的にお友達の家寄り道をしていたということだったのですが、保護者から学校の下校指導が十分ではないという指摘がされました。

またある学校では、下校時の子どもの通行に対するいたずらに対し、学校へ厳重な注意と対応をホームページに公開することが求められたというようなこともございます。

違和感がございますが、ここで学校外の生活には保護者の責任がありますよと強く伝えることができず、学校が対応する状況が多いというのが状況です。

保護者との関係が険悪になることを避けたいし、ここで学校の責任放棄と捉えられることも困るので、学校が対応するケースが多い。そういう状況です。保護者の苦言を学校が受け止めるしかない状況が続いています。

(長野市立裾花中学校 土屋校長)

それでは中学校の様子をお話したいと思います。中学校では個別対応が必要な生徒への対応、またそれに伴う保護者さんへの対応、ここに1番疲弊しているかなと感じております。

「授業中の教室からの抜け出しと徘徊対応」についてですが、授業から抜け出して、徘徊する生徒が日常的にいる学校が多いです。

このような生徒が複数生徒で徒党を組むと、授業崩壊や器物損壊に繋がることもあるので、すぐに手の空いてる教員で対応するわけでありまして。けれどそうすると、生徒から暴言など挑発行為を浴びせられるということもあります。

また、学力向上ということにつきましては、そのような生徒も含めて、全ての児童生徒に保障しなければならないわけでありまして、やはり特定の生徒に手厚く指導していくというような場面が増えていきます。そうすると他の生徒の保護者から、そのような生徒にもっと厳しく指導してほしい。また他の生徒も大事にしてほしいというような要望が来て、ジレンマを感じるということもあります。

また、不登校、いじめ予防のため小さなサインを見逃さないように休み時間でも常に生徒に目を配っている先生がたくさんいます。昼休みなども休憩なしで子どもを見ているという状況もあります。

そしてひとたび子ども同士のトラブルが起きると、今なかなか子ども同士で解決

できない状況が多く、教員が仲裁に入ると、それについてもまた保護者にも連絡してというようなことが増えていきます。

そしていじめを訴える保護者の皆様への対応にも、これまた多くの時間を費やす状況になっています。生徒の事故予防と事故対応につきましては、アレルギーを始めとして、大小に関わらず、疾患を持つ生徒への配慮に非常に時間を費やしております。また小さな怪我・トラブルでも連絡しなければならないというような、説明責任の圧力も感じております。また登下校時の事故連絡等に関しても、小学校と同じように、現場に駆けつけるような状況になっています。

また部活動については地域移行が進んでいるところでもありますけれども、成果への圧力、また選手起用や戦術などに対する批判対応、また大会運営や専門外の部活動を担当したときの負担というものも大きくなっております。

そして地域連携、とてもありがたいのですが、それに伴って、連絡調整や会議に費やす時間が増えているような状況もあります。中学校の状況でありました。

中教審が学校・教師が担う業務に関わる3分類を示していますが、今回は赤で示された部分、そしてお時間あれば保護者対応についても話題にさせていただきながら、学校を後押ししていただければと思います。

ある学校だけが、1校だけでうまくいってもそこで終わってしまいますので、今回業務内容の検討を、学校の現状を踏まえて、様々なお立場の方と話題にし、学校の業務の縮減の流れを作っていただけるとありがたいです。どうかよろしく願いいたします。以上であります。

(長野県教育委員会事務局 水野教育政策課長)

ありがとうございました。

続いて質疑応答に入りたいと思います。ここからの進行は、長野県教育委員会、武田教育長にお願いしたいと思います。武田教育長よろしく願いします。

4 質疑応答

(長野県教育委員会 武田教育長)

はい。どうぞよろしく願いいたします。

今、2人の校長先生からのプレゼンをいただきました。お忙しい中準備をいただきありがとうございました。

この後の話し合いをする上で、学校の状況を皆さんに共有すること、承知していた

だくことが、このプレゼンの趣旨でございますので、まず今話を聞いていただいて、疑問に思うことや、確かめておきたいことがあったら、ご質問いただきたいと思いますと思いますが、どうですか。

ちょっと硬い雰囲気が入ってしまい発言しにくいかもしれませんので、皆さんあとに続きやすいよう、まず信大の西先生ご質問お願いします。

(信州大学教育学部 西学部長)

今お話をお伺いして、私も17年ほど教員の経験がございます。ただし公立学校での教員経験は一切持っていませんで、全て私立学校でございました。

その中で、ちょっと思うのは、なぜ学校が運営の中で前例踏襲に傾いてしまうのか。昨年までの通りにやればやりやすい、変えようとしなないというのは、なぜ起きているのでしょうか。特に教員の風土的要因の中で、前例踏襲する雰囲気が強いと項目立てされているので、ちょっとそのあたりを伺えればと思います。

(長野県教育委員会 武田教育長)

野口校長先生どのように感じられてますか。

(長野市立緑ヶ丘小学校 野口校長)

小学校の行事は、コロナで大幅に変えざるを得ず、前例踏襲が通用しませんでした。こういう何か大きなことがあると変わるのですが、それ以外はやはり何となくこう続けてきて、そっちの方が楽というか、そういう雰囲気が一般的にあるような気はいたします。

(信州大学教育学部 西学部長)

確かにやりやすくなるのでしょうけれども、常にやっぱり私も今大学の組織を運営する側に立ったときに、業務の見直しはどこかでやらないと変えられないと思うんです。学校の中の雰囲気がなかなか変えられないということが、やはり非常に根強く残ってるのかなと。小・中学校、高等学校まで含めてそういう雰囲気はあるのではないかと思います。一方でお伺いしたいのは、私立学校の今現状ってどうなんですかということなんですけれども。

(長野県私立中学高等学校協会 校長部会 添谷会長)

長野日大の添谷と申します。

先生方のプレゼンお聞きして、重なるところはすごく多いなと思いました。

特に先程、土屋先生から授業中の徘徊ですとか、抜け出しの話がありましたけれども、おそらく発達障がい、グレーゾーンのお子さんは、実は幼・小・中・高、かなり増えている。私立も含めてですね。

その支援といいますか、保護者様もその理解が十分でなかったり、その理解に時間がかかったりするの、おそらく同じではないかなと思いました。

私立学校におきましても、今おっしゃっていただいた現状というのは重なる部分が、程度の差はあるかもしれませんが、同じだと認識いたしました。以上です。

(長野県教育委員会 武田教育長)

ありがとうございました。他の点でご質問ございましたらお願いをいたしたいと思っておりますがどうかですか。

(長野県 阿部知事)

6 ページですね、この教員の風土のところ、今の前例踏襲のところの下に外的評価を気にする、と書いてありますが、ここ誰からのどういう評価を気にするということなのでしょう？

(長野市立裾花中学校 土屋校長)

学校評価制度というものがあまして、必ず保護者、それから子どもたち、教職員も含めて、アンケートを実施し、それに基づいて次年度また今後の学校教育の運営の方向を出していくということが行われております。

(長野県 阿部知事)

今の前例踏襲と関連するのですが、学校のテストのあり方にも関係するかもしれないけれど、評価というのは別に全てAを取れとか、全て100点を取るということではなくて、自分たちの立ち位置がどうなっているのかというのを把握して、改善に繋げるものためにやるのではないかなと思うので、過度に評価が低いとまずいと思うよりは、評価を次にどう生かすかということの方が重要な気がするのですが、あんまりそういう感覚にはならないということなのですか。

子どもたちのテストの成績も同じ感覚だと私は思ってるんですが、別に100点の子と50点の子がいて、50点の子だったら、どういうところが足りなかったのかをみんなでサポートしてあげることが大事で、単にその評価が悪いというその一時点で捉えるのは、おかしいのではないかと思うのですが、そこら辺今どんな状況なのでしょう
か？

(長野市立緑ヶ丘小学校 野口校長)

おっしゃる通り、改善のための評価だと捉えています。それは授業だけではなくて学校運営もそうなんです、ただそれがうまく伝わらなくてネガティブな評価をいただき、それをどう改善していったらいいかということを見通せないときは、やはり非常に学校全体が悩みますし、マネジメントがどうだったんだろうかと、管理職はやはり悩むところです。

学校によっては本当に斬新に取り組んでいるところもあるのですが、それがなかなかやはり広がらないという状況は感じております。

(長野県 阿部知事)

これ、まさに今日の趣旨だと思うのですが、学校だけでは変えきれないところがたくさんある中で、全部学校で抱え込んでしまっているが故に、いろんな評価を受けてもなかなか変えられなくて結局改善にうまく繋がらないので、その評価の良し悪しだけにいってしまうのかなと、ちょっと勝手に想像したのですが。そんな感覚だっという
ことでいいですか。理解の仕方としては。

(長野県教育委員会 武田教育長)

ここで言っている学校の外の人っていうのは、保護者の方とか地域の方、あるいは教育委員会？

(長野市立緑ヶ丘小学校 野口校長)

保護者や地域の方もありますが、教育委員会もあります。

(長野県教育委員会 武田教育長)

あとここで評価という言葉を使ってるけれど、どちらかというと、苦情とかクレームとか、そっちも含んでるのではないですか。そこはどうなんですか。いわゆる通常

の学校評価のことを言っているのですか。

(長野市立裾花中学校 土屋校長)

外的評価で全てひっくるめたという意味だと思うんですけども、学校評価にもやはりたくさんクレームに近いことが書かれるわけです。お話の通り私も気にする必要はないと職員に、これをもとに改善していけばいいんだって言うんですけども、結構やはり教員が真面目なのか、それで心折れちゃう教員さん、結構いるんですよね。ここはまたちょっと人材育成で考えなきゃいけないと思ってるんですけども。

(長野県教育委員会 武田教育長)

どうもありがとうございます。この後の話にも通じてきそうな今の話題ですけど、他にご質問ありましたらお願いいたしたいと思いますがいかがですか。

今日は服部先生、高校の方が出席されているので、高校の状況はどうですかね。

(長野県高等学校長会 服部会長)

よろしくお願ひします。高校の状況も、今小中で発表があったようなそういった課題、同じようなものを持っています。

本校でも、まさに例えば授業中に抜け出してっていうのが、一応地域の進学校と言われている中でありましてけれども、本当に多様な生徒が入っている。それに対しての処し方のノウハウを教員が持っていないということが、今ことを難しくさせているというところで、そういった部分の研修をどんどん入れていかないと、1人ひとりの生徒に対してのその処し方は職員の中で共有しきれていないということがあります。あと、前例踏襲について言うと、私今年1年目なのですが、やはり人事異動があって、新しい職場に管理職で行ったときに、やっぱりこれまでやってきた学校のルールというのがあって、それに何か手を加えようというところでその人間関係とかコンセンサスを得るまでには、時間かかるな、という原因があるかなと感じてます。

(長野県教育委員会 武田教育長)

教室を生徒さんが抜け出したときに、追いかけるのは誰なんですか。

(長野県高等学校長会 服部会長)

そうですね、中学校からの情報も聞きながら対応考えたんですけども、授業して

いて教員がふっと見るといなくなっているときに、基本携帯で連絡を取り、どこにいたとかいないか、というのをやっているんですけども、このやり方だととてもじゃないけれど他の生徒がほったらかしになってしまうこともあるので、いなくなったときにはすぐに家庭と連絡を取って、保護者の方に来ていただくという。ただ、保護者も仕事をしているので、家に連れ帰ったときにその生徒が親がいない隙に抜け出して行方不明になったりとか、ボーダーレスになっている状況で、学校の外のこと、いなくなった、という状況になったときに教員がどこまで探しに行くかとか、どこで連携取るか、というそういう課題が今大きな問題としてあります。

(長野県教育委員会 武田教育長)

授業をやっている先生は授業を続けるわけだから、授業のない先生が探す、という形なんですか。

(長野県高等学校長会 服部会長)

授業者がまずは連絡を取って、ということなので、一時的に授業は中断します。その後、生徒会の職員、教育相談の係、場合によっては校長教頭で連携して探す、という状況になっています。

(長野県教育委員会 武田教育長)

そうすると、いわゆる空き時間と言われている時間も決して空き時間にならないというような、そういう感じですか。

(長野県高等学校長会 服部会長)

そうですね。結果的にやはりそういうのを集約して学校組織を動かすときには、教育相談の係、特別支援コーディネーター、養護教諭はかなりの負担を負っている状況もあります。

(長野県教育委員会 武田教育長)

高等学校も同じような状況だというお話でございましたが、他の方がいかがですか。この後、先生の業務をどこまでやるべきか、という議論をしていくんですけども、その前提となる今状況について確認をしているところですが、よろしいですか。

(長野県PTA連合会 城村会長)

ありがとうございました。先程プレゼンいただきました、中学校改革を阻む要因というところで2番目、学力保障とございます。

これ、実際本当に保護者や地域から学力を保障するように、あるいは教育委員会からそう言われるのでしょうか。私個人的には、学習環境の保障は大事かなと思ってるのですが、学力をつける・つけさせる、というところは、やはり中学校としてどうしても求められるものがあるのでしょうか。

(長野市立裾花中学校 土屋校長)

やはり高校進学っていうものが迫ってまいりますので、保護者も子どもたちも志望校を持ってるケースが多いんですね。ただ現実そことなかなかマッチしない場合、そこはやはり先生たち何とか応えていかなきゃいけないっていうような、そういう思いで取り組んでいるような状況です。

(長野県PTA連合会 城村会長)

これは先生方が自発的にその学力をつけさせてあげたい、というところなのか、外的に外からそうしろ、そうしなさい、という、先生方が感じるプレッシャーなのか、それはどうなのでしょう。

(長野市立裾花中学校 土屋校長)

直接的にこれだけの学力をつけなさい、というような具体的なケースは少ないですけども、やはり教職員の方で感じ取ってですね、しっかりと高校進学できる学力をつけてあげなければという思いで取り組んでるといったような状況かなと思います。

(長野県PTA連合会 城村会長)

理解できました。ありがとうございました。

(長野県教育委員会 武田教育長)

もう1人中学校の校長先生、牛越先生おられますけど今の点についてどうですか。

(長野県中学校長会 牛越会長)

県中学校長会の牛越でございます。土屋先生おっしゃっていただいた通りではあり

ますが、その学力の捉えも、いわゆるテストで何点取るっていう学力もありましょうが、その他にも、いわゆる学力に定義されたものはいろいろあって、子どもたちの学び方とか子どもたちの追究したいことをどんどん探究していくようなこと、そういう力は生涯に渡って使えるものであるということからすると、例えば小学校の段階、中学校の段階において、ある程度その子が将来に向かって前向きに生きていくための1つのやり方としての経験をさせたり、その次の見通しが持てるようなことはしていきたい。

だからこれはあくまでも職員とか学校の願いでありますけれども、その辺のところ保護者とかとちょっとずれてるというか、重点のかけ方が違うということは確かにあるかなとは思っています。

(長野県教育委員会 武田教育長)

ありがとうございました。

それではですね、これからグループ討議に入っていきたいと思うんですが、今現状の話がありましたけども、教員の業務をどうしたら教員の手から離していけるのかという点について、この後グループ討議をしたいと思っています。そしてその後全体討議をするようにいたしたいと思います。グループ討議について事務局の方から説明をしてください。

(長野県教育委員会事務局 水野教育政策課長)

資料2をご覧いただければと思います。ここに掲げてあります表は、「学校・教師が担う業務に係る3分類」と呼ばれるものでございます。

学校として、子どもたちの成長のために何を重視して重要なリソースである時間をどんなふうに配分するかということは、重要な課題であるかと思えます。

ここに掲げられております14の業務につきましては、これまで学校や教師が担ってきたわけですが、特に具体的に役割分担などを議論すべきものとして、平成31年に中央教育審議会が答申をしたものでございまして、文科省の方でもこれについての考え方を示すなど、これに沿って、学校が担う業務の明確化、あるいは適正化に向けて取り組んでいるところではありますが、やはり学校だけではなかなかうまくいかないということがある状況かと思えます。

そこで本日のテーマでありますけれども、特定の学校業務について、どうしたら教員の手から離せるのかということテーマとさせていただきたいと思えます。

この後のグループ討議ですが、前半の15分間は、前半と囲んだところ、基本的には学校以外が担うべきとされておりまして、4つの業務につきまして、グループで意見交換をお願いいたします。

そのグループでの意見交換の結果を、この4つの業務ごとに。「やめてよい」「どちらともいえない」「学校がやるべきだ」という3区分で、グループごとに評価といたしましょうか、表明をお願いできればと思います。

それから後半の15分間ですけれども、今度は保護者対応につきまして、先程のプレゼンにありましたような事柄、あるいは日頃のお考え等、こちらはフリーで意見交換をお願いできればと思います。

グループ分けにつきましては、お手元の出席者名簿、座席表に記載をさせていただきました。お名前のところに黒い丸の印をさせていただいた方、大変恐れ入ります、グループ討議の進行役をお願いできますでしょうか。ご自身のご発言もいただきつつ進行役にとということで恐れ入りますが二刀流をお願いできればと思います。

それではここからグループ討議に移ってまいりたいと思います。

(長野県 阿部知事)

ちょっとよろしいですか。前提条件を揃えた方がいいのではないかとあって、学校徴収金の徴収管理って、今具体的に小・中学校でどんなものをどれぐらいの金額取り扱ってるかっていう、何かイメージを教えてくださいたいのですが。

(長野市立緑ヶ丘小学校 野口校長)

修学旅行とか行事に関わる旅行貯金っていうのが、大体6年生で5万円弱、それからあと個人で使う教材等1万円程度です。

(長野県教育委員会 武田教育長)

後ろの方は、学級費っていうものですか。

(長野市立緑ヶ丘小学校 野口校長)

学級費というか、教材費なんかですね、ワークとか。図工で使う教材です。

(長野県教育委員会 武田教育長)

それは担任の先生が対応していますか。

(長野市立緑ヶ丘小学校 野口校長)

学年の先生です。

(長野県 阿部知事)

それって、口座名とかって誰の名前で。

(長野市立緑ヶ丘小学校 野口校長)

学年ごとに通帳があって、学年費扱いになっています。

(長野県 阿部知事)

通帳の管理とかは担任の先生がやるんですか。

(長野市立緑ヶ丘小学校 野口校長)

学年の担任管理です。

(長野県教育委員会 武田教育長)

学年の中でどなたかの担任の先生が、ということですね。結局先生がやっていると。中学はいかがですか。

(長野市立裾花中学校 土屋校長)

基本的には一緒です。額が若干多くなります。

(長野県教育委員会 武田教育長)

修学旅行って今いくぐらいでやってるんですか。

(長野市立裾花中学校 土屋校長)

7万ぐらいで、あと学年費は1万円ぐらいで。

(長野県教育委員会 武田教育長)

で、会計担当の先生がいるんですよね。先生がやってる、というところは変わらない。知事よろしいですか。

(長野県 阿部知事)

はい。

(長野県教育委員会 武田教育長)

他に何かありますか。もう一度事務局お願いします。

(長野県教育委員会事務局 水野教育政策課長)

はい、ありがとうございます。それではですね、グループ討議に入らせていただきます。

Dグループの皆様は、Web参加の方がおられますので、恐れ入りますがお隣のお部屋へご移動をお願いいたします。他の皆様はグループごとにお話ししやすいような形に少し近づいていただければと思います。記録を担当します職員がそれぞれのグループのところに参りますのでどうぞよろしくをお願いいたします。

それではお願いいたします。

5 グループ討議

【各グループから出た意見は、別添参照】

6 全体討議

(長野県教育委員会 武田教育長)

皆さんありがとうございます。今グループ討議で、それぞれの業務について「やめてよい」「どちらとも言えない」「学校がやるべきだ」ということを、各グループで判断していただいたということで、その結果を映しますのを見てください。このようになります。

登下校については、AからEまで全て学校が辞めても良いと言っていますが、Fグループだけ△になっています。Fグループ、逆になぜ×をつけられるんですか、みたいな感じで質問してください。

(長野市立緑ヶ丘小学校 野口校長)

はい。急に改革的にやることは効果的かもしれない、という話題が出たのですが、参加の方の中でも、命を守るのが学校の役割じゃないかというような意見がありました。一気にやるのではなく、学校も担いつつ対応していくことが求められてるのではないか、と思ったところです。

いずれ○に近い△から×に近い△になり、やがて×になっていくっていう、ちょっと柔軟に対応していく時期じゃないかな、というような話題が出たので、ここで×は厳しいのではないか、という結論でした。

(長野県教育委員会 武田教育長)

例えば不審者が出たとか、クマが出たとかいうときに、学校の先生が、下校は知らん顔していいですか、ということですよ。

どうですか。×を付けられたグループで、今の点については議論があったかと思うんですが、どんなふう整理をされたのか、というところを、どなたか積極的に挙手をして発言していただければと思うんですが、いかがですか。

(長野県公民館運営協議会 松木会長)

Cグループでは、今の話の通りなんですけど、クマが出たとか、こういう動物が出たっていう場合には、やはり警察の方をお願いしたりとか、教員が出たりする必要ないだろう。同じように不審者もだろう。ということの意見が出てまいりましたので、×ではあるんだけど、時として、やはり出なければいけない場合が出てくるので、それを除外すると×でいいんじゃないかなとしました。

(長野県教育委員会 武田教育長)

ちょうど隣の割田さんは県警ですが、そういう場合、警察は対応してくれるんですか。

(長野県警察本部 生活安全部生活安全企画課 少年サポートセンター 割田室長)

もちろん警察も、不審者が出たりクマやイノシシが出ると、最大動員かけて活動に出ますので、有事の際は先生たち、あるいは地域の方たちの御協力をいただきたいと思います。

(長野県教育委員会 武田教育長)

そうですか。ありがとうございます。そうすると、新年度に登校してくるときに街頭に先生が立って登校指導するとか、そういうものはもうやらない、ということではないですか。

(長野県小学校長会 桂本会長)

県小学校長会の桂本です。本校でも4月はやってないです。地域の方が立っていただいている。ただ下校の際、児童センターへ送るというのは、1年の担任が付いていたりする。このBグループでも話題になったのは、基本的には学校の教員が関わることはないんだけど、例えば地震・自然災害等有事の際は、先生たちが「私達も帰ります」なんてことは絶対ない。学校でちゃんと子どもたちの安全確保に努めるというのは大前提の上で、あくまでも平時ではやらないということです。

(長野県教育委員会 武田教育長)

Aグループいかがでしょうか。

(長野市立裾花中学校 土屋校長)

柔軟に対応する姿勢は担保しつつ、今のような×ってというのが、私は個人的原則ではないかと思うんですけど。法令上も登下校については学校の責任ではないっていうように記されてるところもあるので、いずれそういう形を構築していくことは必要だと思うんですが、現状ではそうは言っても、まだ必要なところは結構あるんじゃないかな、という気はいたします。

(長野県 阿部知事)

登下校のところで。他もそうなんですけど、今回の設問が「学校がやるべきかどうか」、という話になっていて、これ実は学校がやるべきだけでも先生がやる必要はないみたいな、学校間役割分担もある。あと私の立場で、登下校のところで気になるのは、通学路って決めてますよね。通学路の安全対策って、一生懸命県警とか地元の人が学校の人と一緒にやっていて、例えば交通安全指導は学校ではしっかりやらなければいけないだと思いますが、そういうところは当然やるとして、例えば今、途中で道に立っていただいている人たちは、これはちょっと教えてもらいたいんですが、誰から頼まれているのか。学校からなのか市町村からなのか、あるいは自主的にやっているのかで、仮にそういうところで、この登下校を誰がやるかっていうことと併せて、登

下校中に考えるリスクにはどんなものがある、それらに対してはもう自己責任というか子どもの責任に帰していいのか、あるいは周りの、例えば今日はこの学校の責任かどうかというところだけに絞られてますが、あるいは通学路の安全対策が不十分であれば、例えば道路管理者だったり、そういうところだって責任を問われるケースもあり得るかもしれない。

何が言いたいかというと、学校が○か×か、という議論とは別に、私の立場では特に強く感じるんですが、行政全体、市町村とか県としての責任のあり方とか、あるいはこの問題の解決形として、おそらく中教審は、学校以外が担うべきって、ちょっときつい言い方をすれば、中教審的視点ではとにかく自分のところの責任の範疇から放棄できれば何とかなるっていう発想ですが、誰かが担うべきってなったときに誰が担うのか、そもそも担わないのか、というところまで整理しないといけないんじゃないかというのが私の感覚です。

(長野県教育委員会 武田教育長)

通学の子どもたちの危険って、どんなことがありますか。

(長野県交通安全協会 吉岡総務部長)

今の知事のお話でいくと、通常の登下校に関しては、例えば春先とかそういう部分において、独自に、地域によって違いますけども、それぞれの地区で独自に決めて、その安全協会で独自に決めて、人を出してやっていく、あるいはその市町村と連携してやっていく。やり方、色々あります。

ですからやっぱり一番は、小学生であれば、特に1年生たちは歩き方から始まって教育をしなくてはいけないってところ。そういう立場からすると、まず学校から「こういう形でやってくださいね」という話があって、それで安全教育を進めていく。私たち独自でやっていくところもありますけれども、そこはいろんなその地域の考え方もありますので、それに沿って安全教育をしていく。でも学校は学校の立場として、担っていかなくてはいけない部分はあると思います。やはり子どもたちを安全に、子どもたちの命を守るっていう部分では、それも教育の1つというか、ビジョンの1つだと思いますので、そこは進めていかなくてはいけない。だから市町村も県もそれについてやはりやっていく必要があるのではないかなと思います。

(長野県 阿部知事)

私の話で混乱させて申し訳ないんですが、ただ私は基本的には学校の先生の仕事からは離れた方がいいのではないかと思っているのですが、そのときにどういうリスクがあって、そういうリスクはもう許容する社会にするのが、やはりこのリスクはこういう角度から、要は地域の皆さんの力で、とか、あるいは行政の力で低減するという前提で先生から手放すとか、多分そこまでやらないと保護者の皆さんとか県民の皆さんに説明しても反発だけ出てしまうので、多分そこまでちゃんと整理をした上で、×なら×という整理にした方がいいかな、というのが私の感覚です。

(長野県教育委員会 武田教育長)

はいありがとうございます。教育委員会とすると、学校から離れればいい、というところまででいいんですけれど、知事のお立場だと、誰がそれを担うのか、というところがやはりあるというお話でありました。

②の放課後から夜間などにおける見回り、児童生徒が補導されたときの対応は、今度はDグループだけ△になっておりますが、Dグループのどなたか、他のグループに問い掛けていただけたらと思います。

(信濃教育会 大日方会長)

②で示されているこの状況でございますが、おおざっぱな表現ですので、この字面だけでいくと我々も×ではないかと判断したわけでございます。ただ、これについてはもう少しケースによって対応が違ってくだらうと考えまして、△をつけたところでございます。

例えば、夜間の見回りなどについては、学校ではなくて保護者とか、あるいは警察とか地域とかそういったところでやってもらえればいいのかと思うのですが、次の「児童生徒が補導されたとき」ですけれども、これは基本的には家庭での対応になると思いますけれども、最近は様々な状況の家庭がございますので、保護者では対応しきれないような場合もあります。そういったときには、やはりその子を支えてあげるというか、その子のことを考えたときには、学校なりが対応する場面も出てくるのではないかなというようなことで△をつけたところでございます。

(長野県教育委員会 武田教育長)

どうもありがとうございます。それでは県警の割田さん、補導された子どもさんへの家庭に連絡がつかない場合は、学校に連絡することもあるんですか。

(長野県警察本部 生活安全部生活安全企画課 少年サポートセンター 割田室長)
ケースバイケースですが、あります。

(長野県教育委員会 武田教育長)

ちょっとそういう場合は、学校は対応せざるを得ない、というかするものだっていう、そういう考え方で大日方会長、よろしいですか。そういう場合は、学校の職員が警察に迎えにいくということですよ。

(信濃教育会 大日方会長)

はい。

(長野県教育委員会 武田教育長)

その点、他のグループではそんな論点は出なかったでしょうか？

全体としては、学校がやらなくてもいいっていうところは、Dグループも同じで、例えばお祭りの見回りとか、そういうのはいいけど、特殊なケースについては、必要ではないか、というそんな整理でよろしいですかね。

学校徴収金は、Aグループだけ△になっていますが、いかがですか？

(長野市立裾花中学校 土屋校長)

基本的に私費会計ということで、保護者から預かってるお金を子どもたちにとってよりよい使い方をしていくという部分があるんですけども、行事か何かでお金を使うこともあるわけで、そのとき学校行事っていうのは、これライブですので、直前になってもっとこうしていったらいいんじゃないかと、ここでこんな物品が必要になるんじゃないかと。

これ全ての子どもに還元できる物品だよ、買おう、となったときに、これを学校以外で管理するということになると、指定業者から買わなければいけないとかですね、急にそんな言われてもお金が動かないとかになってくると、やはりライブ感覚で行事が作れなくなってしまう、というような部分も起き得ます。

また、旅行に関しても、学級ごとにお昼を食べる場所が違うなど、非常に細かい作業がありまして、そういう点も掌握している教員の方が会計しやすいっていう部分もあって、手放せる部分と、やはり学校でやっていた方が動かしやすい部分とあるなど

いう意味の△であります。

(長野県教育委員会 武田教育長)

手放せる部分はどんな部分ですか。

(長野市立裾花中学校 土屋校長)

給食費は手放してもいいけど、旅行貯金と学年費学級費経費は、教員がやった方が融通が利きます。でも、旅行貯金は手放せるかなとは思っている部分もあるかと。

(長野県教育委員会 武田教育長)

これどうです皆さん。Aグループの意見にまとめてしまっていいですか。

(長野県小学校長会 桂本会長)

私達のグループは×なんですけれども、例えば今、給食費の方は公会計化されているとか、あるいは無償化されているところで、ここは分けられるかなと思います。その他の、例えば教材や、音楽鑑賞芸術鑑賞のお金、校外活動、小学校であれば遠足などのお金という、そういう活動費、修学旅行なら積み立てで、ということで、学校では様々なお金を学年会計として通帳作ってやっています。

昔は農協の方とか郵便局の方がお金を学校に取りに来てくれたんです。今そういう状況でないで、例えば小学校で言えば、週 29 時間当たり 24 時間程度持っているほとんど空き時間のない先生が、学年費担当ということで、唯一の空き時間を銀行あるいは郵便局へ行ってお金を下ろしてまた振り込む体制を作らなければいけない。

さらに昨今、非常に手数料がかかっていると、その手数料をどこが負担すればいいのかなんて話も出てきてはいるんですけれども、そう考えたときに、先程知事が言われたことは大事なことで、学校が担わないとなったときにどこが担うのか、そこは、私はこの4つの業務については明確にしておく必要があると思っています。

例えば学校徴収金であれば、市町村のところで給食費と同じような形ができないものかと。小中学校であれば、多くの市費職員が引き上げられ、県費の事務職員の1人体制がほとんどですが、市費の事務職員の方がいるならば、その方にやってもらうのも1つの手かもしれないと思います。大金を持って、先生たちが空き時間を使うような状況がないようにすることは、何らかの形で給食費と同じような形で工夫できるのではないかと。そうしていくべきではないかと思っています。

(長野県教育委員会 武田教育長)

ということは、先程の話で先生たちがやらなくなって誰がやるのかって言ったら、市町村教育委員会なのかということですね。近藤会長いかがでしょうか？

(長野県市町村教育委員会連絡協議会 近藤会長)

どこの組織も、会計担当を置くのが普通だと思いますが、学校だけはないんですよね。

学校事務さんっていうのは、学校会計はやっていただけるんですけど、今のような教材とか学年会計とか、そういうところまでやる契約というか、業務分担になってないですから、県費の事務さんにそれを頼むのは無理だろうと思います。

そうすると、市町村でそういう人を雇えばいいということになりますが、人件費の問題があるので、おいそれとはいかないと思います。例えば大きい長野市でいうと、大きな学校には市費の事務さんがいますが、学年の児童生徒数が10数人とか10人以下とかっていう規模のところには、なかなかそういう方を雇用できるだけの財政的な余裕がないこともあって、伝統的に先生方にやっていただいております。

(長野県教育委員会 武田教育長)

ありがとうございます。実情をお話いただきました。他の方は学校徴収金のことについていかがですかね。

(長野県 阿部知事)

学校徴収金の話について、いっぺん考え方を教育委員会で整理されたことがあると思ってるんですが、そもそも公会計化するのかどうかっていうことを、もうちょっと真剣に考えなければいけないのではないかと考えていまして。

そのときの議論をしたときに私が思ったことは、今も思ってるんですけども、ちょうど今日から参議院選挙が始まって、物価高騰で、どれだけ減税するのかとか給付をするのかっていうのがメインテーマで選挙が行われている形になっていますが、我々公会計を預かっている立場からすると、100円でも1000円でも負担を上げるっていうのは、やはり家計に負担をかけるということで相当厳しくやっています。

ところが学校の場合は、公会計から離れていて、厳しくなってるというのは私が厳しくやってるだけではなくて、公会計通れば全部歳入歳出予算を議会にかけなければ

いけないので、これはどうしてこれだけ必要なのかっていうのを議会にも県民にもちゃんと説明が必要で、なぜ値上げが必要なんだという話になります。そういう意味では、ある意味民主的な統制がかかるのですが、そうじゃないと、そうした民主的統制がかからない。

先程の旅行代の1人5万円とか7万円とあって、今日の物価高で米が3千円とか4千円とかの議論してる時の私の感覚からすると、極めて大きな金額なんですよ。極めて大きな金額を、なんていうか、民主的統制を経ずにやり取りがされているっていうこと自体をどう考えるのかっていうことを、もう1回しっかり考える必要があるのではないかなと思っています。

必ずしも全て公会計化するべきだと思って申し上げているわけではないのですが、ただ一方でそうしたシビアな議論が少なくとも行政上行われているということをまず前提に、学校における資金のあり方っていうのを考えていただく必要があると思っています。

(長野県教育委員会 武田教育長)

ありがとうございます。確かに学校ではね、厳格にやってない部分もあるのかなというのがあります。

(長野県市町村教育委員会連絡協議会 近藤会長)

給食費の公会計の問題は、全国的に問題になっています。今、学校給食費でいただいているお金は、食材費なんですよ。だから学校給食のほとんどの部分は公会計でやっていただいているので、その食材費が、最近の高騰で栄養士さんたちが大変苦労されてるところなんですけれども、今、知事がおっしゃったように、これを本当にどうしていくかということについては、相当な議論を経ていかないと、なかなかご理解いただくのは難しいだろうなと思います。

例えば、パンのことで言いますと、学校給食のパンを請け負うパン屋さんが今非常に少なくなっている。やっていけなくなっている。やがて学校給食からパンはなくなるんじゃないか、長野県の大部分からソフト麺はもうなくなってくるのではないかと思います。経営が成り立たないわけですよ。ぜひそういう状況を県民の皆さんに知っていただいて、給食費は食材費をいただいているんで、それがどういう状況なのかということも理解が進んでいかないと、なかなか公会計っていうのは難しいと思っています。

(長野県教育委員会 武田教育長)

よく分かるお話です。ちょっともう1つ残ってるのでやりたいと思うんですが、学校ボランティアとの連携調整が、これが見事に割れていて、3対3で、どうしましうかね、引き分けということで収めておきますか。Cグループ、これ△にした理由はどうですか。

(長野県公民館運営協議会 松木会長)

×にできないのは、やはり学校側からこういった能力をお持ちの方を学校にお呼びしたいとかっていう要望が出てくるので、先生たちを外しては難しいだろうなど。地域からこんな方がいますよ、という情報とマッチさせるときに、やはり学校じゃないとできないだろうなどと思って△にしております。

(長野県教育委員会 武田教育長)

Aグループは、△にしたのはどうしてですか。

(長野市立裾花中学校 土屋校長)

教育活動をボランティアの方々と作っていく上においては、やはり地域のコーディネーターと校内のコーディネーターと両方必要ではないかと、ただそのコーディネーターは教員ではない者が担当してもいいのではないかと、という意味で、△にさせていただきました。

(長野県教育委員会 武田教育長)

そうすると、そういう職員が校内にはやっぱり必要だと。

(長野市立裾花中学校 土屋校長)

その方が滑らかに行くのではないかと思います。

(長野県教育委員会 武田教育長)

Fも△付けましたけど、これは何でしたか。

(長野市立緑ヶ丘小学校 野口校長)

はい。今土屋先生おっしゃったのと同じで、校内でスムーズに回すには校内のことを知ってる方である必要があるということと、先程知事がおっしゃったように、実際受け皿ってどこなのっていうと、これを学校じゃないって言ったときに、実は①番もそうなんですけど、どこが連絡調整をするのか、そう考えたときにやはり学校が現実的なのではないかな、という話になりました。

(長野県教育委員会 武田教育長)

いや、でも学校はやらなくていいっていうEグループはどうでしょう。

(信州学び円卓会議 荒井座長)

我々のグループでは、「地域ボランティア」といっても色々なタイプがあるという話題になりました。

例えば、高校レベルの総合的な探究の時間におけるサポートは、特に専門性も求められてきますので、県内高校ではコーディネーターが配置されるようになり、質の向上が図られてきています。この場合、そのコーディネーターは学校外のスタッフと位置付けるべきかという論点があります。

他方で、学校の草取りや清掃、通学路の整備等に関しては、現状のままの運用ですと先生方がとても大変であるという前提を共有した場合は、やはり外部化の検討を積極的に行っていくべきだという議論となりました。従いまして、私たちのグループでは、現状の課題認識を重く捉えて、あえて全て×をつけた結果となっています。以上です。

(長野県教育委員会 武田教育長)

○は1つもなかったっていうのは、やはり何とか教育業務から外していきたい、という思いを込めて入っているのかな、というのがあるかと思います。

もう1つは、ずっとこの議論の中で出てきた、ケースによってはやはり学校が関わるべきだ、というところがありますよね。それから、これ本当に学校がやらなくても、というのは元々あったんでしょうけど、誰もやらないから学校がやるようになって、それがずっと雪だるまのように多くなったのが今かもしれなくて、そうすると今みたいにケースによってというのは当然議論としてあるけれども、どこかで切る、やめるときにすぱっと止めないと、結局これから先同じようになっていく危険性もあるのかな、というのを一部で感じることもあります。

この話はとりあえずここで収めて、次に保護者の対応についても少し時間を取っていただきたいですが、各グループから出た話を説明していただきたいと思います。Aグループからお願いします。

(長野県PTA連合会 城村会長)

PTAの城村でございます。こちらご覧いただいて分かる通り、開かれた学校の在り方って何だろうというところで話が進んでおります。保護者としてこれまで、特に私PTAという立場もあります。要望ばかり学校に、「こうしてくれ」、「ああしてくれ」、ということばかりに終始していたというところ、PTAとしての課題感、申し訳なさを感じています。

これからは要望する側ではなくて、一緒に夢を見て支援する側になっていきたいなと、そんなふうに願っています。そんな意味で、保護者としてはですね、学校の先生方も決して敵対する関係ではなく、受益者ということではなく、仲間としてこれからともに歩んでいきたいというところであります。

私がいるものですから、皆さんちょっと遠慮しながら保護者に対してのクレームをお伝えいただいたのかなと思います。本当いっぱいあったと思うんです。いっぱいあったと思うんですが遠慮してくださいました。ご覧いただいた通りですね、様々な課題あるんだけど、学校だけに全ておんぶにだっこで任せる、ということではなくて、学校の教育の在り方っていうものを、ぜひ地域あるいは保護者にも信頼していただいて、一緒にやっていきたいなというところで話が進んでいるというところでご説明差し上げます。

(長野県教育委員会 武田教育長)

PTAの代表なんで、1つお聞きしたいんですけど。保護者の方々が学校にいろんな要求をしてくる、願いを言うてくるっていうのは、学校を信頼してるからですか、それとも学校に不信感があるからですか。

(長野県PTA連合会 城村会長)

武田教育長はいつも意地悪なことを言いますが、両方あるのかなと思います。やはりPTAとはこうだよねとか、保護者って、学校の先生ってこうだよねって主語が大きすぎますよね。やっぱり保護者っていうのは、確かに先生方に対して様々な思いを持っていて、先日の働き方改革会議のときもちょっとお話ししましたが、先生方との関

係の中での問題や課題、やっぱりありますよね。人がいる以上はなくならないと思ってるんですよ。となったときに何が大事かという、ここをなくすことは保護者としてできないんだけど、つまりこの痛みの分子はなくせないけど、ありがたいの分母は増やせるよねと、PTAとして我々が今やりたいのはそこです。

学校の先生方にありがとうと思っても実際は全然伝えてこなかったよね、という反省と課題を感じていて、これから先生方に目に見える形・耳に聞こえる形で「先生ありがとう」を伝えていこうというのが、今僕らPTAのスタンスになっています。

ですので、今の武田教育長がお話あったように、どっちなの、と言われると、どちらもかなというのが答えになってしまいますが、我々保護者とする、決して先生方を孤独にさせたいわけではなくて、仲間としてともに歩んでいきたいと、新たな関係性をこれから構築していきたいということはお伝えさせていただきたいなと思っております。

(長野県教育委員会 武田教育長)

ありがとうございました。次Bグループどなたか。

(信州大学教育学部 西学部長)

ほとんど最後雑談の中で話してしまして、やはり学校に対しての意識がやはりずいぶん多様化してるんだらうとか、かつては比較的學校に任されてた、というところが大きかったのではないかなと。

信頼関係であるとかそういったものに対しての意識がある程度あった、そんな中で子どもの成長を學校にお任せするっていうような意識があったものが、自らも教育にやはり深く関わるようになった。それが家庭の教育だけではなくて、學校、公教育の中にまで親が関わろうとしている、それが今の現実なのかなと。

ただしそれが、「家を出れば全て學校」という、何かそういう感覚の親御さんも一定数いてしまったのかなと。それが「いつまで経っても子どもが帰ってこないけどどうしたんだ」という苦情が来るとかですね、何かそういったような形であるとか。長野県って移住者が大変多い、そうするとやっぱり風土の違いとか、そういうものからの摩擦、それは學校と保護者の摩擦であったり、保護者間の摩擦であったり地域住民との摩擦であったり、そういったようなものが噴出しやすいのが、子どもたちのいる學校という場であったりするのかなと。

そしてそういったようなものが成功体験であるとか、子どもたちに対しての教師に

対しての大きな期待っていうものを、それがあつた故に、それが実現してないっていうところに対してのお叱りが出てくるそれが一定数あるのかなと。

ですから先程冒頭のプレゼンの中にあつた外的評価っていうその評価っていうものに対するニュアンスが、やっぱり非常に大きいのかなというのが、話題になってるところです。

(長野県教育委員会 武田教育長)

はい、ありがとうございました。次にCグループお願いします。あとのグループは誰が発表するか決めておいてください。

(長野県高等学校長会 服部会長)

小・中学校、高校まで含めて、その現状をそれぞれ情報交換する、という流れでありましたけれども、やはり制度的にスクールロイヤーとかがあつていうのは現状あるのかもしれませんけれども、その前の段階でやはりどんな形で、特に保護者の方の矛を収めてもらうか、そんなところのやり取りは非常に難しいなど。

特に私も個人的に感じているところは、やはり子どもをまん中に置いてっていう中で、どうしても保護者と教職員が直接対峙してしまう、という状況っていうのは非常にまずくて、子どもをまんなかになんかどうやってうまく置いていくのかっていうところが大事で、子どもはどうしても保護者の後ろに隠れてしまつて状況の中での議論というのは、当然当事者にとつてもうまく前に進んでいかないということに繋がるということなんです。

日々の関わりの中で、やはり信用できる教員が1人でもいるとかですね、そういう中でやはりこの先生になら話せるとかということも結構なんですけれども、当事者である子どもがやはり両方の顔を見ながら自分の生きていく道をうまく定めていくという、そんな関係性が作ればいいのかという話であります。

(長野県教育委員会 武田教育長)

ありがとうございました。Dグループお願いします。

(長野県私立中学高等学校協会 校長部会 添谷会長)

結構強烈なキーワードで話してしまひまして。やはり企業であればカスタマーセンターとかですね、しっかり組織立つた形で対応してるかと思うのですが、学校にはそ

れが現実的にはないというところで、管理職の先生中心に対応されておられるケースが多いのかなと思います。

Dグループでも過度な要求ですね、ちょっと不信感にもつながっているようなケースにどう対応したらいいのかという話題で話し合いを行いました。傾聴、受容、共感が非常に大事かなというふうに私は思っております。

「そういう思いだったんですね」というふうに聴くだけで、かなり保護者の方、ちょっとすっきりされたりですとか、ここはできるけどここはできないというお話し合いができるのかなと、非常にこれは時間がかかることもありますので、先生方だけにお任せするとですね、ちょっと先生方の中でも、こういうのが得意な人もいればそうでない方もいらっしゃると思いますので、そこをやはりチームで対応していくことが非常に大事かなというふうに思っております。雑駁ですが以上です。

(長野県教育委員会 武田教育長)

ありがとうございます。Eグループお願いします。

(長野県中学校長会 牛越会長)

保護者対応について、例えばこれを外へ出すというようなことを考えたときに、やはりその学校で起こったこと、または学校の子どものトラブルのことを他に出してしまうことが、丸投げしてしまうとか責任放棄だとかというふうに受け取られ得ないかどうかという、そういう思いがやはりあります。

すると学校で対応するとなるんですけど、以前よりも子ども同士のトラブルや保護者が入ったトラブルが増えている現状はないかと、昔だったら子ども同士が喧嘩しましたと言ったら、「君と君はこっちおいで」ってやって済んでいたことが、もう今はネットを介しての問題だとか、問題が多岐に渡っていることは、もう学校は今まで対応できていたことも、もう件数自体が増えてしまったり深刻さが増したりすることによって悲鳴を上げる状態になってはいないかという危惧をいたします。

そうしたときに、やはり何らか改善するためには第三者を入れて調整を図りながら進めるみたいなことがうまくいけばいいんですけども、これもお金の問題もあったりいろいろするというようなことで、なかなか難しい。本当は普段そういうトラブルが起きないように普段から丁寧に人間関係を作っていくのが大事なんでしょうけれども、なかなか難しいな、というところが話の中身でありました。以上です。

(長野県教育委員会 武田教育長)

はい、ありがとうございました。Fグループお願いします。

(長野県経営者協会 保谷総務部長)

我々Fグループはですね、Dと同じように苦情とかクレームにフォーカスを当てて協議させていただきました。

大概クレームとかトラブルを大きくする人は、ほぼほぼ決まった人がよく起こすパターンが多いということで、そういうふうな人についてはしっかりフォローして、校内の経験値の豊富な方とか、捌き方が上手な方、専門の方また専門の部署みたいなものがあれば、トラブルが大きくなって済むのではないかと思います。

多少のトラブルは、先生たちにも育つ要因になると思いますので致し方ないと思いますが、大きな問題になる前にカバーしてくれる人、蓋をしてくれる人が来てくれればいいのではないかと思います。

また先程話に出ました通り、例えば各企業のOBの方とか警察のOBの方とかがついていただくと、うまくさばいていけるのではないかというような意見も出ました。以上です。

(長野県教育委員会 武田教育長)

はい、ありがとうございました。

グループディスカッションおよび今全体で話し合い、情報交換をしたわけですが、今の議論を、県義務教育課の武内教育幹にまとめていただきました。

学校でいう板書というやつですけども、武内教育幹は数学の先生なのですが、大分丁寧に書いていただいたというところです。

色々あるので一概に、というのは難しいですけども、どこかで、やめるものはやめていかなければいけない、というのはありましたし、もう1つ学校の先生がやらなくなるのはいいんだけどそれを誰がやるんだ、という受け皿も同時に議論していかないといけないというところがありました。

ぜひ後ほどスマホ等で撮っていただければ、今日の話し合いの様子が分かりますので、撮影してください。

7 その他

(長野県教育委員会 武田教育長)

次のお話をちょっとさせてください。資料3の防止ポスター案を映してくれますか。これはですね、校長会の方から要望されたものでありまして、桂本さんちょっと話をしてください。

(長野県小学校長会 桂本会長)

資料3にありますポスター案についてです。

これですが、東京都を始めいくつかの県や自治体ので、こういったものを作成したところ、今話し合いの対象になっている保護者対応で、ある程度の抑止力があり非常に効果的であるという声を聞きました。

それを受けまして私の方で武田教育長にぜひ長野県でもこういうものを作っていただけないかをお願いしたところ、早速作っていただき、ありがたく思います。

ポスターですけども、県内全ての小・中学校、義務教育学校、特別支援学校、高校に配布していただけると大変ありがたいと思います。

併せてですが、知事の方で冒頭まずは長野県から新しい形ということでありますが、プレゼンの中にも「学校は追い風や後押しが欲しい」という声がありました。他の都道府県は教育委員会を出しているところでもあります。

それが今の資料3を見ると、長野県教育委員会の他、長野県、それから今日の子どもの学びをトコトン支える県民の会と、3者の連名で出していただくようになっていきます。これは本当に私達学校現場にとっては、追い風になり後押しになると感じますので、ぜひこれを配布いただければと思います。

(長野県教育委員会 武田教育長)

このようなポスターを作りたいということでは桂本さんから話があったように、長野県と長野県教育委員会と、それから子どもの学びをトコトン支える県民の会、この会議の3者でこのポスターを各学校に配布しようかと思うのですが、もしご異議がなければ、これで各学校へ発信する準備をしたいと思いますがいかがでしょうか。

ではご異議ないということで、このポスターを早いうちに各学校に配って、貼るかどうかは各学校の判断で校長先生の判断でということにいたしたいと思います。

それでは、どうもありがとうございました。それから今日、会議と一緒に参加しておいていただいております荒井先生から、一言お願いいたしたいと思います。

(信州学び円卓会議 荒井座長)

信州学び円卓会議の座長を拝命しております信州大学の荒井でございます。今日はお疲れ様でした。

今のポスター案ですが、ぜひ使うフレーズ等を検討いただきたいと思います。教育関係者でさえも、自分の学校の勤務時間をきちんと理解していない、あるいは、きちんと外部に伝えていない可能性もありますので、こうした基本的なことから情報発信していくことが必要だと感じています。

なお、本日教育業界外の方からも様々なご意見をいただきましたので、信州学び円卓会議としても、学校関係者のみならず、教育関係者、保護者、地域の方、学生も含めて、何らかの形で情報共有をし、対話していくような機会を設けられたらと考えています。今日ありがとうございました。

(長野県教育委員会 武田教育長)

はい、ありがとうございました。それでは事務局にお返しします。

8 知事所感

(長野県教育委員会事務局 水野教育政策課長)

ありがとうございます。最後になりますが、知事に本日の所感をいただければと思います。お願いいたします。

(長野県 阿部知事)

どうも皆さん熱心なご議論ありがとうございました。

若干ちょっと斜め的な意見をいろいろ言って恐縮でありましたけれども、基本的には学校の先生の負担をいい形で減らしていくということは全く異存がないどころか、しっかりやらなければいけないと私の立場としても思っています。

その一方、先程グループ討議でも言ったんですけども、やはり今日はどちらかというと、教員の皆さんが担っている周辺業務のところの話だったのですが、本当はコア業務のところも、本来こういうところこそ、先生たちにしっかりやってもらいたいなということと一緒に考えつつ、先程ちょっと言っていたんですけども、学校の先生方非常に真面目なので今の法律だとかですね、学習指導要領だとかですね、一生懸命守っていて、守ること自体は、私も法令遵守すべき立場なので必要であります、しかしながら世の中どんどん変わっていますので、法律だって学習指導要領だって変えなければいけないことは変えましょうという提案をしていくことが必要ではないかなと

思っています。

学校のカリキュラムに私があまり個別に口を挟むと教育に対する知事の介入になってしまうので、私はそちらの部分は武田教育長始め教育関係者にお任せしますが、やはり私の立場でやはりこういうところをもっと予算をしっかりとつけて、学校の先生の数を増やしていくとかですね、あるいは国に対して苦言を呈してですね、学校現場からこういう声が出てるけれども、もっと柔軟に対応できる法制度にするべきじゃないとかですね、そういうことが私の役割と責任だと思っておりますので、また引き続きこの会議も皆さんと一緒に議論を重ねさせていただいて、より良い学びの形、そして何よりも長野県に暮らす子どもたちが本当にしあわせになってもらえるように、一緒になって努力をしていきたいと思っております。

最後の「来校者の皆様へ」のポスター、長野県としても職員のカスハラ対策もしっかりやらなければいけないと考えている中で、まずは長野県の場合は学校現場の皆さんを守るというところからスタートしたというのも、やはり学びの県づくりを目指す長野県としては、非常に意義あることではないかなというふうに思っています。

引き続き皆さんと一緒にあって、より良い学校より良い子どもたちのサポート体制を作っていきたいと思っておりますので、よろしく申し上げます。どうもありがとうございました。

9 閉会

(長野県教育委員会事務局 水野教育政策課長)

ありがとうございました。改めまして本日までご参加の皆様、本日は活発にご議論をいただきましてどうもありがとうございました。

いただきましたご意見を踏まえましてまた第2回の会議の方、企画をしてみたいと思っておりますのでどうぞよろしくお願いいたします。

それでは以上をもちまして本日の会議閉会とさせていただきます。

どうもありがとうございました。

(了)